

縮み志向の日本人

イー・オリヨン（李御寧）著

学生社

イー・オリヨンへ李御寧へ著

「縮み」志向の日本人

学生社

〔著者略歴〕

李御寧 一九三四年（昭九）韓国忠清南道に生まる。一九五六年ソウル大学文理科大学国文科卒業。一九六〇年ソウル大学大学院碩士。ソウル大学講師。

一九六〇年、七三年『韓国日報』『朝鮮日報』等の論說委員を歴任。現在、梨花女子大学教授。『文学年報』（月刊）主幹、一九八一年、八二年国際交流基金の招聘により、東京大学比較文学研究室客員研究員。

著書は『韓国人の心（増補 恨の文化論）』（日本語版・学生社刊）のほか、評論のほとんどは『李御寧著作集（22巻）』、『韓国と韓国人（全6巻）』に収録されているが、主要なものは次の通り。

『運命の糸つむぎ——これが女性だ』、『抵抗の文学』、『知性の細道』、『西洋から見た東洋の囁』、『一枚の木の葉がゆらく時』、『韓国の神話』、『歌よ、千年の歌』（時調論）ほか。

小説は、『將軍のひげ』、『無翼鳥』、『暗殺者』ほか。戯曲・シナリオに、『奇蹟を売る百貨店』、『春香伝』、『エミレ、エミレ』等がある。

一九七九年韓国文化芸術賞受賞。

Printed in Japan

著者の諒解により検印を省略します

「縮み」志向の日本人 1982年1月30日 初刷発行
1982年9月30日 20刷発行

著者 © イー・オリョン Lee O-Young

発行者 鶴岡 陞 巳 東京都千代田区九段南2-2-4

発行者 株式会社 學生社 東京都足立区鹿浜3-27-14
電話 03 (857) 3031 (代表)
振替・東京 1-18870 番

落丁・乱丁本はお取替します

205709

目

次

一章 裸の日本論

1 「日本論」祭り……………二〇

幻の衣を着た「日本論」 「甘え」は日本独特の言葉ではない 海草と
人糞の日本論のウン

2 フォークと箸……………二六

東洋を忘れた視線 日本は本当にタテ社会か 西洋文化のヒマワリ

3 小さな巨人たち……………三三

一寸法師との出会い 豆と「ワン」の接頭語 島国の風土論でいくな

4 俳句と大豆右衛門……………三九

障子の穴で見る世界 ラブレーの巨人と江戸人の夢 小咄・国民性比
較論

二章 「縮み志向」六型

1 入籠型——込める……………三九

東海と蟹 「の」を重ねる不思議 涙一滴に縮まった海 「縮み」の
意識の文法 入籠の箱

2

扇型——折畳む・握る・寄せる

日本オリジナルの風

高麗扇か日本扇か

扇のマトリックス

握り

哭

動く文化——引き寄せる
らあつた

動く美術品

トランジスタ文化は平安時代か

3

姉さま人形型——取る・削る

人形の国

小さきものはみなりつくし

手足を取る

仮名作りの発

瓦

想と「どうも」文化 集約と背面美

4

折詰め弁当型——詰める

食膳を縮める

日本の食物と韓国の食物

詰められないものは「つま

七

らないもの」

和字と国訓の意味

利休ねずみ

文庫本とコンサイス

5

能面型——構える

ストップ・モーションの波

「構え」の動作

能面の中間表情

じっ

三

と見る視線

6

紋章型——凝らせる

聞くことと見ること

族譜と家紋

半てんとのれん

名刺と飯

壺

「名詞」から「動詞」への文化論

三章 自然にあらわれた「縮み」の文化

1 「綱」と「車輪」……………二〇

庭文化の生まれ ありのままの山水 借景の論理

2 縮景——絵巻としての庭……………二六

シマと呼ばれた庭 回遊式庭園は名勝の写生画である 石組のレット
リック

3 枯山水——美しき虜……………三三

石と砂の沈黙 三万里程を尺寸に縮む にわとりになった自然 ゴ
ミをゆるさない日本人の自然観

4 盆栽——精巧な室内楽……………三〇

ペーコンの植木と家光の木 見る自然から触れる自然へ 樹の仕立て
と風景描写 手の上にのせられた風と土

5 いけ花——宇宙の花びら……………三六

一輪の朝顔 花の美しさを見るなその組み方を見よ 神が作り出せな
かった空間 枝の空間性と花の時間性

6 床の間の神と市中隠……………四三

日本の舞いと神のはしご 神棚に招かれた神々 仏壇とテレビ 飲
まれる自然 「市中の山居」 日本の旗にはイデオロギーがない

第四章 人と社会にあらわれた「縮み」の文化

1 四畳半の空間論……………三〇四

マツチ箱からウサギ小屋まで 鴨長明の住宅観 畳と生活空間の単位
広場と茶室 狭い空間への回帰 方丈の伝統 日本のコロンブスが
発見した新大陸 にじり口の演出

2 達磨の臉と正坐文化……………三〇七

精神の液体―お茶とお酒 茶がない茶会 狭き門に入れ 「立つ」こ
とと「坐る」こと 正坐と気をつけ文化 身は刀、身は琴 行動の
三種の神器―ハチマキ、タスキ……………

3 一期一会と寄合文化……………三〇九

二つの傘 「死」の心 咲く花より散る花を愛する 一生懸命の生き
方 「腹切り」の美学 寄合文化 肌で感ずる触れ合い文化 イデ
オロギーを超える心 交際費共和国！ 通り魔は日本的犯罪 五、
六人のスモール・グループ

4 座の文化……………三一〇

一億総俳優 茶三味の一体感 人の茶の湯になるな 日本料理とマ
ナイト 能舞台の美学 花道で会う観客と演技者 連歌とゴルフ

5 現代社会の花道……………三一〇

売る人と買う人の「座」 外人が見た日本の駅 ホームの押し屋

6 「物」と取合せ文化……………三三

数寄一物への愛 物で考える 茶碗ならずんば死を 実感信仰とい
う宗教 三種の神器とオッチョコチョイ

五章 現代にあらわれた「縮み」の文化

1 和魂のトランジスタ……………三六

龍馬は忙しい トランジスタの逆転ホームラン 小さい手とラジオ・
ブーム 和魂とはなにか 石庭と電卓 宇宙の広さがアップルになった

2 「縮み」の経営学……………三五

新しいアイデアは小藩から ビグミー・ファクトリー QC・小集
団活動が作った神話

3 ロボットとパチンコ……………三四

なぜ産業ロボットの名は日本式か パチンコの歴史 小さな玉と機械
との対話

4 「なるほど」と「メイビー」……………三六

宇宙と茶の間のエレクトロニクス 一丁の鉄砲が三十万丁になる 二
番手で行く スモール・イズ・ビュートイフル



第六章 「拡がり」の文化と今日の日本

1 国引き文化……………三二五

星を知らない人たち 内と外の二つの世界 一匹狼の悲劇 日本人
の三Sと外交舞台 「世界八分」にされるな

2 サムライ商人……………三二六

崎型の一寸法師 ホンダに乗ったサムライ この道はいつかきた道

3 広い空間への恐怖……………三二七

大地に移した盆栽 秀吉はなぜ失敗したか 太平洋戦争で負けたのは

4 トロッコとイカダ……………三二八

芥川のトロッコ マーク・トゥウエインのハックルベリー・フィンの冒
険

5 「名誉白人」の嘆き……………三二九

白人になれる夢 コウモリの栄光と悲劇

終章 鬼になるな、一寸法師になれ……………三三〇

「縮み」志向の日本人

一章
裸の日本論

1 「日本論」祭り

幻の衣を着た

「日本論」

私はいまここで鬢びんに白いものが混じり出した大学教授として、もしくは○・二の近視メガネをかけた文芸評論家として日本を語ろうというのではありません。それよりは、まず小学校時代の子供にかえて日本の姿を見、考えてみたいと思います。書斎の本棚にさし込まれた本——何よりも日本について述べているあのたくさんの本はしばらくうっちゃっという、小さな肩に背負ったランドセルの白いノートとちび鉛筆だけを持ちたいのです。ことに欠かせないのは柔らかでよく消える消しゴムかもしれません。

ただのアレゴリーではありません。ほんとうに私の日本語やその主な知識は、太平洋戦争が終わって、韓国が植民地統治を脱するときまでの小学校の教室で得られたものです。それなのになぜ私は、貧弱な日本語やその知識を省みずに、むしろその少年時代にかえて日本を語ろうとするのか。

この大胆にして不思議とも思える冒険をあえてするのは、よく知られているアンデルセンの童話『裸の王様』が、私にその勇気を与えてくれたからです。大人は、群衆が作りだした幻想の衣を通じてしか王様を眺めることができませぬ。たとえ王様が裸であるのに気づいても、間違っているのは自分の方だと思つて、よくそのことを口に出せませぬ。なにも着ていない王様の素肌を見つけたのは子

供の眼でした。と同時に、それを大きな声でいえたのも子供の口でした。

これまで日本について書かれたものはフランスのファッション雑誌のように華やかであり、それだけに流行したのも数多くあります。そこには、日本人、外国人を問わず、立派な学者、芸術家、評論家をはじめ、観光の旅費のタシにするために書かれた旅行者のものにいたるまで、きりがありません。日本に一日だけ滞在する外国人は秋葉原に行き、一週間では富士山を見に行き、一カ月を過ごす人は日本論を書くという次第ですから。

戦前とはかく、戦後に日本で著わされた日本論の著作は少なくとも千冊以上に達しています。「菊と刀」「甘えの構造」「タテ社会」など、逆にその題名がとられて、のちに流行語となったものもあり、「日本株式会社」「エコノミック・アニマル」など、流行語を本の題名にしたものも少なくないのです。日本で日本論がベストセラーになるということは、御輿おごこしになるということを意味します。すく人々がそれを担ぐお祭りがはじめられるのです。

それらの流行語は、新聞では見出しに、雑誌では巻頭座談会のトピックスに、また放送では時事解説者の合言葉として使われています。書き手にしてみれば、かなりアカデミックな講堂でつくられた用語が、いつの間にか演歌の花道を通っているのです。

そのために、このようなお祭り騒ぎを通じてでなく、直接自分の眼で日本文化の素肌を見るということは、ほとんど不可能な状態にあります。自分も知らないうちに、「群衆と流行がつくりだした幻想の衣」というヴェールがかぶせられているからです。そんなわけで、私は小学校の子供となって、日本文化の裸身はだかを見て論ずるといふ、小さな決心を試みてみました。

「甘え」は日本独特の言葉ではない

日本人が書いたものであれ、外国人が書いたものであれ、その日本論に「幻想の衣」がかぶせられがちなのはどうしてでしょうか。そしてその虚構を剥いだ子供の眼とは、そもそもなんなのか。それを見るために、日本論祭りの御輿のひとつとなった『甘えの構造』を例にあげたいと思います。土居健郎氏のこの本は「日本人論」それ自体を明らかにする上においてもまた欠かすことのできない名著だからです。私がこの本に興味を寄せた理由は、内容そのものより、日本人独特の心理を掘り下げようとする発想法とそれをのべてゆくその論理の展開にありました。

土居氏は「日本人の心理に特異的なものがあるとすれば、それは日本語の特異性と密接な関係があるにちがいない」と、その方法論を明確にしています。そうして手に入れた玉手箱がすなわち、「日本語独特の語彙であると確信」した——「甘え」という言葉でした。

しかし、はたして「甘え」は日本人独特の語彙か、これをまず問いたださなければ、その玉手箱から出るものは、空しい煙だけということにもなりかねません。

ところが、はなはだ恐縮な話ですが、「甘え」という「言葉」は、日本からジェット機で葉巻一本吸っているうちに着いてしまう、すぐ隣の国にも路傍の砂利のようになっているのです。韓国語には甘えよりもその使い方がもっと細分化された「어리광」と「응석」という言葉があり、それがまたさかんに日常生活で使われています。「甘えん坊」は「응석반이」、「甘える」は「응석부리다」といいます。「甘やかす」は「응석받다」、「甘える様子」は「어리광」です。ことばの意味ばかりでなく、韓国の子育ての大きな特徴をなしていますから、「甘え」は日本より韓国の精神構造とより深い

関連があるといつてもいいくらいです。大げさに痛がったり、苦痛を誇張して訴えることによって他人にもたれかかる「オムケル鬱鬱」ということばなどは、たんなる「甘え」よりずっと複雑です。

それなのにどうして、土居さんのような立派な学者がそんな大きな過ちを犯したのでしょうか。客観的な論拠なしに自己の信じていることをすぐ確信してしまうのが、つまり日本人独特の心理の「甘え」だということをみずから証明してみせるためだったとは信じられません。それは土居教授個人に限らず、明治維新以来、日本人の脱アジア的思考の産物ではないだろうかと思われのです。すなわち、土居教授が、「甘え」が日本独特の語彙であると「確信」したのは、日本語の達者なイギリス婦人との対話からです。彼女はみな英語で話していたのに、子供の幼年時代のことと及んだとき、急に日本語で、「この子はあまり甘えませんでした」とのべたというのです。なぜ、そのことだけ日本語でいったのかと聞いてみると、それは「英語ではいえませんと答えたのである」ということなのです。

そうだから甘えが日本独特の語彙であるというじつに珍しい論理は、明治の開化以来、日本人にとって知らず知らずのうちに、英語がすなわち西洋全体あるいは世界の言語として刻み込まれているという証拠でもあります。そうとも思わないと、英語にないからそれは日本語の特異性だという論理が、すぐに生まれてくるはずがありません。そこに「日本と日本人論」の「幻想の衣」を解くカギがあるかもしれません。

日本人がこれまで書いてきた日本・日本人論には、「甘えの構造」のように英語にないから日本語の特異性だという、主として英米人との単純比較を通じて得られたものが、かなり見受けられます。もう少し広い視野で書かれたものであっても、白人（欧米人）文化との比較論の域を出ていません。

その証拠に、土居さんがイギリス婦人の代わりにフランスやドイツの婦人を考えてみる可能性はじゅうぶんにあっても、韓国婦人はどうかとなると、それはほとんど期待できないことでしょう。「甘え」が日本だけのことばであるかどうかを知るには、欧米諸国より先に日本語ともっとも類似性の多い韓国語から調査してみる方が、正常な思考というものです。

海草と人糞の

日本論のウツ

それができないから、意外にも日本人が日本特有の精神構造であると指摘しているものなかに、じつは韓国や東洋一般の普遍的な特性に該当する事がらが多くあらわれているということがあります。複雑な例をあげるまでもありません。たとえば、樋口清之さんは「世界の文明国の中で、海草を食べる国は日本だけです」といっていますが、ひところ韓国産の輸入規制をめぐって論議のかまびすしかったノリは海草ではないというのでしょうか（もっとも韓国は文明国ではないといわれれば、それまでですけれども）。

また梅棹忠夫さんを始め日本人学者五人の共著である『日本人の心』という本では、「人間の排せつ物を野菜にやる有機物のサイクル、人糞を肥料に使うとはおどろくべき発見」と声を大にして主張しています。しかもその「高度の農業技術」は他の民族には見られない、ひとり日本人だけの創案だとも断定されています。しかしほんとうに驚くべき発見は、盲人であっても韓国のどこかの農村に、ほんの十分ほど立っているだけで、その驚嘆してやまない有機物のサイクルが日本民族特有の「高度の農業技術」でないことを鼻だけで知ることができるのに、なぜそれを日本特有のものだと確信するのかということなのです。

「甘え」の場合と同じように、欧米社会になれば日本独特のものと短絡させてしまう例の習慣的思